

目から鱗 **チャップリンの殺人狂時代 (1947)** *MONSIEUR VERDOUX: A Comedy of Murders*

舞台は1930年代のフランス。不況の影響で30年の間忠実に勤めた銀行を解雇されたアンリ・ヴェルドゥ（チャップリン）は、妻子を養うため、裕福な独身女性を次々とだまして結婚し、殺害したのちに全財産を奪うという「ビジネス」を展開する……。

『モダン・タイムズ』『独裁者』『ライムライト』などのコメディ映画で有名な「喜劇王」チャールズ・チャップリン（1889-1977）が58歳のときに発表した作品である。この作品でチャップリンは、彼のトレードマークとも言うべきチョビひげ、山高帽、だぶだぶのズボンなどの衣装を初めて脱ぎ、知的なフランス人紳士・ヴェルドゥ氏を演じた。さらにその内容も、従来の人情味あふれるコメディとは一変、1人の殺人鬼の行動を追ったサスペンス調の展開や、第二次大戦前の不安な世相の生々しい描写が目立つシリアスなものとなっている。

発表当初は興行成績が振るわなかったばかりか、「赤狩り」（政府による共産主義者排斥の運動）の風潮の中で問題作と

され、1952年にチャップリンがアメリカを追放される一因となった。その一方で、チャップリン本人が自伝の中で最高傑作と評した作品でもある。



▼DVDのジャケット。「ワンコインDVD」の普及により古典映画も手軽に購入・鑑賞できる。

この作品を傑作としている要素のひとつに、ラストシーンにおける戦争批判のメッセージが挙げられるだろう。「大量殺人者としては私はアマチュアにすぎない」「1人殺せば悪人だが、100万人殺せば英雄になる。数が（殺人を）神聖化

する」などと言い放つヴェルドゥ。これは殺人を悪としながら、戦争における大量殺戮を肯定する矛盾を突いた指摘である。それと同時に、その時々のご都合主義で人命の重さに差をつける過ちを犯しがちな人間への、時代を超えた警告とも言えよう。

みどころはこれのみに留まらない。殺人鬼でありながら独自の美学に基づいて颯爽と世を渡る主人公ヴェルドゥの人間性には不思議と心惹かれるし、チャップリン自身の作曲による音楽が要所要所で効果的に用いられているのも魅力的である。そして、およそ喜劇王のイメージとは程遠い内容でありながら、笑いの要素も決して忘れられていないあたりは、やはりチャップリンらしさを感じさせる。

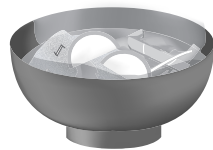
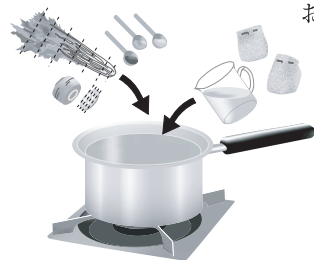
異色の内容ゆえに敬遠されがちな『殺人狂時代』だが、笑いの中に見え隠れする社会風刺の精神というチャップリン映画の醍醐味を、一風変わった趣向で味わわせてくれる作品でもある。大衆受けを狙った映画には無い新鮮な刺激を求める方にお薦めしたい1本である。（孟徳）

かんたん Cooking

材料（2人前）

丸餅	2個
油揚げ	1枚
水菜	1束
人参	1/4本
かまぼこ	適量
だし汁	400ml
醤油	小さじ1.5杯
みりん	小さじ1.5杯
酒	小さじ1杯

もち巾着汁



- 油揚げは熱湯をかけて油抜きし、2等分して袋状に裂く。その中に丸餅を詰めてつまようじで口を止め、巾着を作る。
- だし汁に巾着を入れ煮立ったら、3～4cmの長さに切った水菜と千切りにした人参、各調味料を加える。
- 餅が軟らかくなるまで5分ほど弱～中火で煮込み、かまぼこをのせて完成。

※切り餅を使う場合は適当な大きさに切ってから巾着に詰めるとよい。

はみだしすてーじ

彼／彼女がいて楽しいのは夏。いなくて寂しいのは冬。
⇒祝日が少なくて楽しいのは夏。

（法・1 菊咲）
（多くて寂しいのは冬；編）